

## ■リメティファが元ティファ衣装着たら痴漢された話-体験

とあるスラムにある小さなバー「セブンスヘブン」は今日も元気に営業中。

経営するのは格闘美女、ティファ・ロックハート。

ザンガン流格闘術を学んだ男顔負けの実力者だが、反して容姿は極めて端麗。

格闘家とは思えないしなやかで引き締まった身体の上にはむっちりとした脂が乗っており、特にバストは男なら誰もが目が行ってしまふサイズ。

タイトなインナーを着用していながら、そんな手に余る量感であるため、もしインナーを脱げば……などと下衆な噂もされる程。

動きやすさのために露出度も高く、ミニスカートからは程よく肉が付いた太股が見えており、あわよくばスカートの中が見えなしかと苦心する客もいるが、やはり簡単に隙を晒すわけもなく、仮に見えてもスパッツを穿いているため女性としてしっかり防御されている。

それでも充分すぎる……むしろ肝心なところが見えないからこそ、想像を掻き立てられた男たちが彼女目当てに通い続けていた。

そんな目で見られているとは知らず、ティファは今夜もせっせと働いていたところ……少年客とすれ違った際、臀部に違和感を抱いた。

「はい、お待たせしました……っ!？」

(今、お尻触られ……あれ?)

いくらティファが極上の美女でも、並の格闘家でも敵わない彼女に簡単に手を出す男はいない。

ゆえに触られたような感覚があっても咄嗟に反応できず、一瞬硬直の後に振り返る。

少年客はごく自然に食事を続けており、痴漢を働いたようには見えない。

(わざと……じゃないの? でも……)

意図的に触ったのなら不快でしかないが……事故の可能性もあり、トラブルを起こすのも避けたいところ。

ティファは何もなかったように酒を置くと、カウンターに戻ろうとして……またすれ違った時、今度は確かに触られた。

(多分……きっと、気のせい……)

もみっ♡

「……っ！ こらキミ！ 今触ったでしょ！」

すぐ振り返り、現場を目撃したのもあって少年の手首を掴み上げる。

素早い動きに少年は縮み上がって冷や汗を流すも、まだ表情はへらへらとしたまま。

反省している様子が見られないため、ティファは話をつけるため少年を裏のスタッフルームへと引きずっていく。

「はぁ……自分が何したのか、わかってないの？ 仕方ないわね……キミにマナーってものを教えてあげるわ！」

——……

—————……………

ぱあん♡ ぱあん♡ ぱあんっ♡ ずぱあんっ♡

「あっ♡♡♡ や♡♡♡ やめっ♡♡♡ もう……中はっ♡♡♡」

ゴビュッ♡♡ ビュルッ♡♡ ビュビュウウウウッ♡♡

「あああああああああつ♡♡♡ あ♡♡♡ っ♡♡♡ っ—————っ♡♡♡」

教えられたのはティファの方であった——

スタッフルームに連れていかれた少年。一見してただの小柄な彼もまた、ティファ同様に見た目には似つかわしくない実力者であった。

ティファの隙を突いて後ろから襲い、拘束。更に媚薬と魔術も駆使した淫技で辱めると、あられもない姿まで撮影。

痴漢を注意するはずのティファは、写真をバラ撒かれたくないなら……と脅され、一転して言いなりの身にされてしまう。

写真を盾に、ある命令を下されるのだが……

「これ……私の……？ これを着ればいいのね？」

強いられたのは、少年が用意した衣装を着ること。

といってもその衣装は元々ティファが着ていたものに酷似しており……少年が言うには「別の次元のティファ」が着ていた衣装であり、ティファにもこれを着て欲しいのだという。

陵辱されたのは許しがたいことだが、何の仕掛けもない服を着せられるだけで済むならそれに越したことはない。

(そんなことで済むのなら……というより、拒否権はないのよね……)

レイプ写真がバラ撒かれることだけは防がなければならない。

いつか少年が隙を見せれば、写真を奪えるかもしれない。今は従順になったよう演じるべく、「ティファの服」に身体を通していく。

——……

—————……………

「ちょっと、これ本当に私の服なの？！ 全然足りないじゃないっ！」

しかし、与えられた服は似て非なるものであった！

(こ……この服……！ 恥ずかしすぎる……！ こんな異常よ……っ！)

紅潮することで服の異常性を訴えるティファ。

というのも、与えられた衣服はシャツにサスペンダー、スカートと、元の服に比べ型や色の基本は同じなのだが、スカートは一回り小さく、ぱつんっ♥ と音がするほど引き伸ばされているため、いつ破れるか心配になってくる。

それ以上に心配なのが、肝心のインナーとスパッツ、更にはブラが存在しないこと。

(シャツとスカート、だけって……！ 隠す気ないの？ これじゃ……ま、まるで、痴女じゃないの……！)

自他ともに認める身体的特徴、大きな胸。ティファは少しでも主張を避けるため、黒いインナーシャツで押さえ込んでいたのだが、インナーがないことで締め付けから解放され、爆乳が必要以上に目立ってしまった。

今こそ布の厚みで何とかなっているが、動いて発汗すれば乳首も布越しに浮き出てくる可能性があり、極めて下品なことになっている。

そして何よりノーガードの下着。スパッツがないためショーツ……パンツが防御されておらず、不意なパンチラ事故を防げない。スカートが小さくなった今では、何かあればパンツが簡単に見えてしまう。

胸を必要以上に見せること、ブラもつけずパンツを隠すケアもしないこと。これらは現代の倫理観においては有り得ないことであり、場合によっては女性の方が逆セクハラで批難されてもおかしくない。

貞操観念が強く、普段から最低限気を付けているティファにとって、この「もう一人のティファ」の服は非常識極まりなく、着ているだけで羞恥心に囚われそうになる。

別次元の自分は一体何を考え、こんな衣装で夜の店を営んでいたのか――

(こんなの着てたなんてウソよね?! じゃないと……もう一人の私って……)

ぎゅむ♥

「あっ♥ ……こら、またキミなの?」

少年の命令通り営業再開していたティファだが、また少年の手が接触。

スパッツが無い分だけ敏感になった尻を再び痴漢され、思わず変な声が出た。

ショタの尻揉み痴漢を怒りたいが、両手が塞がっているため軽い注意で済ませるしかない。

もともと、痴漢に強く抵抗しないことも少年の出した条件ではあるが。

【いやー、むちむちのお尻見てたら、つい手が……】

「それ以上やるなら、本当に怒るわよ!? ……それより……本当にこれ、私の服なの?」

【うん、リメイク前はコレ着てたよ?】

「リメ……? 何を言ってるのか分からないけど、私はこんな……その……変な服、着たことないから!」

【そんな怒らないでよ、よく似合ってるよ? サイズはやっぱりちょっと合わないけど……ほら、みんなティファお姉ちゃんのこ

と視姦してるよ♪】

「……うるさい、わね……あ♥ 手……離しなさい……っ♥」

【はいはい♪ あ、少しならいいけど、みんなからの痴漢はなるべく抵抗せずに我慢してね〜♪】

周囲から見られていると気付く、少年の手を引き剥がして客に酒を出す。

その際どうしても前傾になり、胸を押し出すような姿勢になる。

やはりインナーが無いいため以前よりも胸部が目立ち、酒を受け取る客もいつも以上に凝視してくる。

「ど……どうぞ……♥♥」

（やだ……スゴい見てる……♥ ううん、気にしちゃダメ……♥）

普段は真面目な他の客も遠くから覗き見ており、痴漢で発熱している身体は雨のような視線を意識するだけで動揺が広がってくる。

気にしないようにそそくさと振り返るが、そのせいで少し体勢が崩れ……

「あ……」

【あぶない！】

がっしいっ♥

「んひいいっ♥♥」

客が支えようとしたのだが、その際に胸が掴まれて艶のある声が出てしまう。

少年に尻を触られた時もそうだったが、普段あるものがないせいで敏感になっている。

特に胸はインナーもブラもなく薄いシャツだけで、最も視姦の対象にもされるだけあって感度の上昇具合は尻肉以上。

下心はあれど意図せず触れた男も驚くほどの喘ぎっぷりを見せてしまい、真っ赤になって胸を隠す。

【えっ？ あの……ティファさん大丈夫？】

「だ、大丈夫ですっ♥♥」

(ま……また、痴漢……♥ いえ、今のは事故よ♥ そもそも、私がフラフラしてたから……♥ 気を付けてたら、大丈夫なはず……♥)

見られるだけならともかく、少年以外の客にも痴漢されては身が持たない。

他にも痴漢がいるなど考えたくないし、今のは単なる偶然の事故。そう思い、変な姿勢にならなければ大丈夫だと気を取り直す。……が、今度は立って注文を受ける間、不自然に客の少年たちがティファの後ろを通り抜けていく。

「はい、えーと……」

すり……♥

「ビール……一つ、ね……♥」

(今の……また痴漢……♥ ……でも、これくらいなら……♥)

場所によっては客で詰まっているため、どうしても不可抗力で接触してしまうことがある。スパッツがないため痴漢のように思えてしまうが、これくらいならと我慢し続ける。

(……こ……これくらい♥ どうってこと……♥)

すり♥ さわ……っ♥

(あ♥♥ また……♥♥ でも♥♥ これくらいなら……♥♥)

むにゅっ♥ ぎゅむうっ♥

「あっ♥♥」

(か……完全に……♥♥ 痴漢、してる……♥♥ やだ……また、感じて……っ♥♥)

不可抗力で当たっているだけ……のはずの手はなかなか離れず、見過ごせるレベルをあっさり超えて尻の感触を堪能しだす。

少年以外にも邪な客が存在すること、更に少年以外の痴漢にも感じてしまうことが明らかとなってショックを受けるティファだが、そもそもティファの無自覚の誘惑に勝てる男などそうはいない。

元々が顔も身体も性格も極上なのに、いきなり余計な部分がなくなったら、男は「誘っている」のだと勘違いしても仕方がない。これもまた、限りなく不可抗力に近い理由。少年が事故を装って痴漢を働くのも、むべなるかな。

(お尻……♥ スカート……触らないで……♥ 今日は……パンツしか、ないから……♥)

客に公然とここまで触られるのもティファにとって十分に非日常で、緊張と動揺で腰がヒクンと動くのだが……ここから更に、何かの拍子でパンツが見えてしまった。想像すると、それだけでも相当な羞恥で尻肉が震えだす。

(まさか、スパッツはいてないの知ってるんじゃないか……？ いえ、まさかそんな……でも、もしはいてないって知られたら……もし……見られたら……♥)

その時、硬く響く音がした。少年客がスプーンを落としたのだ。

少年が咄嗟に拾おうとするが、しゃがんだ状態ならスカートの中が見えてしまう——もしくはそれが目的で、意図してスプーンを落としたか——ともかく、立場的にも客に拾わせるわけにはいかない。

「あの、私が拾うから……っ！」

(ダメっ♥ これでもパンツ見えちゃう♥)

焦るあまり気付かなかったが、今はスカートが小さくなっているため、ティファが屈んでもそれはそれでパンチラしかねない。やっと気付き内股になってきゅっ♥と太股を締める。しかしどうがんばっても身体に比べてスカートが小さいため、角度によっては確定で見えてしまう。

鍛え上げた筋肉、ほどよい脂が乗っているながら、ほそくしなやかな太股。慎ましく閉じようとする肉の奥からは、スカートで隠し切れない薄桃色が露わになる。装飾もほとんどないシンプルなものだが、今まで見えることがなかっただけに男たちの歓喜は格別であり——ティファの羞恥も一入であった。

(見える♥ 見えてるっ♥ お店の人、全員……♥ は、早くしないと……っ♥)

金属音とティファの声が少し大きかったのもあり、ティファの変化に気付かなかった客も視線を向ける。数えきれない視線が浴びせられ、下着も胸も視姦の餌食。

撫で回されたように全身が赤くなるのを感じながら急いでスプーンを交換し、また奥へ引っ込む。

「はい、新しいスプーン……もう落とさないように、ね……じゃ……」

ずるんっ！

「きゃっ！ ……………あっ♡」

しかし今度は客の足が引っかかり、脚を滑らせ転倒。怪我などはないが、突っ伏した姿勢になってスカートがめくれたため、パンチラどころかパンモロを晒してしまう。

すぐにスカートを押さえて立ち上がったため見られたのは一瞬だが、今度こそ全員に、僅かどころかほとんどパンツを見られてしまった恥にいたたまれなくなったティファは、羞恥と情けなさで真っ赤になってカウンターの奥に引っ込んでいく。

(お客さんの足にひっかかって転ぶなんて……！ しかも……か、完全に、見られた……♡ お客さん全員に……♡ い……一生の不覚だわ……♡♡)

事故などで僅かに見えるだけでも恥ずかしくて堪らないのに、あろうことか自分のミスでパンツ丸見えという痴態を披露するのは。

今まできっちりガードしてきたティファだけに、パンモロ事故はレイプ被害にも劣らぬショックで、呼吸を落ち着かせることすら時間を要してしまう。

「はぁ……♡ でも……もう少しだけ……♡ 今日一日は、やり通さないと……♡」

少年の指示には、今日一日だけ体調にかかわらず終業時刻まで勤務し続けるというのにも含まれている。

多少の休憩はともかく、これ以上は条件を満たせずにパンツだけでなくレイプ写真を見られてしまう。

たわわな胸をゆっくり上下させ、息を整え……ティファはカウンターへと戻る。痴態を見たことで、男たちが勘違いしているなどと知る由もなく……